KODAK Color Control Patches ©The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

ル 3
323
4

伊勢文庫

北名3
323
4

# 東遊記巻之四

## 親不知

越中越後の堺より親不知子不知とゝ
道中人一の難所とゝあ[illegible]く人の[illegible]
[illegible]山乃語北海へ注[illegible]市振ゝふ駅より
[illegible]ゝ不知と山の下ゝ移ゝて二里ばかりの
の語ある[illegible]より断崖絶壁[illegible]
陸地と[illegible]へ通りゝ
ゝゝゝき山一ゝハ大海[illegible]波[illegible]

船人通りもふ通幅七八間或は十間ばかりあり又西こゝ
てゝ二丁ばかりある西あり低るに風起り波荒き時は
西ふ波絶壁の西へ波打つけく通過すし右二里まの
うちに一ヶ所さみ六ヶ所の所ありて幅狭き所ある成
世に新ふ知るふ知らふ知らふ知らふ知らふ知らふ知らふ
よいこゝ無かりしいふ西ふ出佐稲しまりこゝ生間
絶壁の根ふ岩穴ありて十間程つゝ穴ゝ其穴いくつ
もあり波の打よせる時は通り抜人ふ穴へ走り入く
波の引時は人穴ゝ走る又波荒き時は次の穴ふ入て



穴に隠れ通りゝ北風強き時は船日と唱るふへ通
通行なりしゝ走り年に越後の商人越中ふ越
るゝ仕正を手程ふ中程ふて波風
強くなり伴の穴ふ逃入るふ穴深きて夜あけて
走るべき陸カゝ八日ゝ日を穴の中ふ居ゆゝく波
風静まる命なるゝ穴出ゝ其間の機湯
きひゝふ初ゝと波荒き日ふ穴ふ
ゝ穴中ふ避居て五つ落ゝ二日三日
る人ゝ羊ゝ糸ゝ通りせ時は西天

[illegible]ハさのゝ陸うゝ[illegible]ゝ上の山ハ傾くゞゝ
[illegible]年之[illegible]る浪ハ足とし[illegible]ゝ甚悪しく[illegible]
[illegible]余う支冨山の佐伯某[illegible]と通[illegible]
[illegible]ハ肩輿よりゝ拵しゝ人足二三千人[illegible]
輿[illegible]守護し波のゝとゝ[illegible]ぬけて[illegible]
[illegible]人足ゝ浪を避け[illegible]
[illegible]ハ大概の浪風[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ山の[illegible]

[illegible]ゝ人[illegible]ゝ[illegible]村ゝゝ[illegible]又波打際[illegible]
けハ駒迫ゝゝ[illegible]ハ波風[illegible]
山の根一波打通路ゝ[illegible]絶壁の[illegible]
ゝ穿ちて細き[illegible]族人通行[illegible]
ゝも馬ゝ[illegible]ハ[illegible]
の澤ゝゝ[illegible]ハ[illegible]人[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]村ゝ一里[illegible]ゝ青海ゝゝ[illegible]
[illegible]ハ山[illegible]ゝ[illegible]
青海[illegible]ゝ[illegible]ハ王候の[illegible]

まてもはつかに諸よ一人もとらす八百文もとりしとて
あさぶらの要害の地こゝ故よ市振の関所ありて関の人
名人なる義経の家臣醫者にて無雙なる風流の者にて
あるべき藤よりたもつべしと仰せ下され遠の二方は大海一方は
のる山南の五人数十里迄の海岸天険にかゝるとも
天険にかゝるとも義経の弟なれども其の位高き
高貴にして風波荒なる日八百度よりの高位もなく
無事にして風波荒なる日は海岸の高位もなく
風波のよりおそれとの海岸人多くなる

義経の笑

此のうち源九郎義経兄頼朝の怒りよりひそかの
やさぐらをおもむきて吉野新しきに
しかるべく奥州よりの山ふ東御道八達ろ
より嶮しきに出回路を十二人の伴を出仕
てくりの山ふ越前より平泉迄の案内者
ゆくゆくやりくよりて毎度笑うて弁慶
精出の高ふ富理の高ふ
なく辛くして出羽の三湖といふ所に

また代々奥州の領地にてやまと人合戦
所々者もありしかども各初て安堵して
それ作り山伏の姿もなき迫たりしそ皆山伏の海道
解とく代々の兵粮の社より結びて差たりし歌
とりて各の笈を成社頭より出しをもつて
めしぐぐ入りよ代々の祈願の社より笈を
笈七つ所より無社主俗の賀ひ
指を指らの遠玉ふとは世乃ふ人もなく平家物
語盛衰記もあり清よ今も社頭と



了奥羽の二州に入りて所々に昔の関の跡
多き中に白河関は諸人関所とぞ指ゆ今太
平なるにて通りもなく通りもなく
中にも殊に天然の険絶にして甚閑雅なる
勝地にて人色ふかき不なく相添通るとも一人
見を守ぶ万丈もなきの高山にして
越中越後の堺に俗に親知子知と名付る
地に代々越中に山の禁の海中に流れ出る一ツの
巨石陵峨ハ云ひでも故に今も代所を御領

地ゝ市振ゝいふる関に出て佐渡の人ゝ出
船をまち同じく船列ゝも東の限りなれば塔の
実ゝいるゝ多くゝ出て世の人乃ち是や
和歌ゝ詠ゝ来ゝ越後の国界ゝ嵐ゝ関ゝ山ゝ
出て海辺ゝ山ゝ切ゝ葡萄峠ゝ云ゝ有て山中
ゝ小き宮殿ゝ有ゝ山羽越の界も実ゝ天嶮ゝ
為ゝ為ゝ出羽の秋田領と奥州
潟海領の奥ゝ矢立峠ゝ云ゝ有ゝ山ゝ所の関所
ゝ出入甚厳ゝ

絶の天嶮ゝ云ゝ経いふ事ゝの武士ゝ
いとゝも山地と為ゝ出て奥州ゝ入ゝ
ゝ矢立峠ゝ出て奥御の居城平泉ゝ
奥ゝ出ゝ通ゝ及ぶ出ゝ前の二ケ所ゝ
出ゝ出ゝ開ゝ出ゝ通ゝ出ゝ
あき平泉の加賀越ゝ為ゝ
ゝ出ゝ出ゝ出ゝ出ゝ出ゝ
関と出ゝ羽州の地ゝ出ゝ

しゐん山之麓一ちゃう下ると嵐関と申く六七里は
る間まで八里の道を安達ヶ原と申し
しもおにとぶしおりる所也今ハ五十二ヶ所
軍書ハ十三人の作る山伏しゐんと数の品
らぐるハ下ゆ也又奥州の古城弥平泉
の中尊寺よ堀井古帝ら笠かうとして今ハ五ヶ一
つ残る七人の前を世と瀬りて笠ぬ
堀井ハ行ゆ奥州まで百ひ程
胡沙吹

ふさふうバ曇るの七ん陸奥乃姫夫ハ八月秋の夜
の月八千ハ富家つのあるもうと云ふ
人も稀くの寺御あると云甚中よりう雪のごと
りのと吹出し或ハ敵小迫ひ又ハ猛獣よ
八雲と云ハ我牙と思ひ風と甚とのうと中あ
コサ吹といふ之又或説ハ姫夫人ハ虎の皮と巻て笛
と造りて吹くと云コサ吹と云ハ即胡笳
笛琴ハ出ル動き世ハ月も昇ると云不思議
ハ北海よ移ると云

九月廿四日　其体風吹ざる日八まれなり　扨よ毎羽の迫より
てら山屋行更て　海辺沙汰事よ　きき　君宜も涙
くしてき天白日ら　本おい　又外が涙迫八極
海の花ある山ゑ　海氣者よ空濛として雪の義る
ぐ〳〵　松原遠乃海市も平岸海書ゑ多〳〵て　私の
仲東ゑ　も無度孫俗ゑ乃ぶ半あり見とモやとい
ふ無ゑ　て羽州ら津海の迫き竟の気色ら方とん
迫ひ　ゑ西ゑ極の時天とゑ　も平の色き
ゑ　ぐく白ゑ時ら　日色迫も高し

青天白日にして気色よはく秋田に入るに時浪
華より中田公超代二三年代秋田に立ち佐藤相撲なり
しかハ皆しら白布せり或日屋敷に奴僕の古く編ごん
の洗濯し竹竿に掛けしあるを中田見て指し
て代色の市の色に似たりとて二三度
及へるに秋天晴朗の時にも決して雨降ることなし
き色沈み又極の結ぶる日代ごく白きとそ
なり天色よりも天色なるとおもふ人ハ必ずやとつひ
に余ハ只皆の迷ふ所の市の結ぶるにあらるしのみ

しかも光りて波色と共に実に中田の桐のて
しに代遠ざかるあるとハ皆ハ暫く帳実地方ハ陰風に
熱変胡塵市に満るゆえ胡沙吹くハ暑くもやせん
とうしもうべくく津軽秋田辺を北に面し
る地面陰風甚しく南部の地ハ小極あ沈の
度数大抵同しく津軽秋田ども東向の地なるゆえ
日月の色も市の色にしも風甚しく地に中国蔵門
に接かつぐ毎しよりの面たるハ往ちこ山ハ加賀越
中にも遠ざかる北へ北へとも高山なる所反而頼

越こうつも暖氣なるゆゑ向き方角よろしく
氣候もあたまること久しく又秋田城の迹乃村民乃
子供複衣ハ皮のごとくなる木の皮をもつて手拭きこと
巻くゆゑ甚大きなる毛物の遺製ふ
ものなるを取て友らしめ一つ携へ帰りたくもあれ
ども毛逢荷物のまきをいとひやそれ品を省く
はしく記す

## ○藤樹先生

先生ハ俗称中江与右衛門江州大溝の在中
小川村の産なり分部侯の領地の百姓王陽明
流の学者なるゆゑ其徒所近時の学者の乃ぶ
ふよあるべきぶ思ふる先年余此事あり尾
州の一士人男来あるく什途とるゆゑ先生の墓所
小川村まるゝすく畑うつ農夫ハ導しゆ畑道ふ
是ハ幼年ハ南ゝ業門ゝくきんゝて先生ハ
ゆく迄もくゆき業ふ
ゝ切ハ入りやうゝもゝ
へあゝ布の小袋のね織と者ゝ彼士人強るきて

ねんごろに寄りある雪うふ墓ぶに教へ人はくすきバ湯
ばなかふふとおひすて行うら墓所よいうぬ彼農
夫竹垣の戸と開さいぐ入っておし訪へといいて
そ奥ハ戸ゑよ伏せう士人大よ寄るれ拙い家族と
改名せーい我為ハあしで先生と敬そうして
ありるとこ身拙も海ハ茨樹の家筋の者うて
やあるし向ハ方ハいいぐさまで代村の者ハ一人
して先生の内恩と蒙ぐるとし親ばらや
まひるとうくしむ米成ぐさまハ先生

ひ内ぐ落なを悲い必ちうぐ地うに小屋こうぐと紙文
拙も米ぐとしへいひあと訪る士人も初ハ只方自
ざうと一見の仏ぐく為ぐしが代農夫ぐ一と足
ゆるに今更ぐ仏もあくまう祈んでうよ拙
て訪うあしまう手良家服後ぐく村井氏よ親
く寄ぐまし二にある日村井かう呼ぐ訪ぐまし
拙ル今ぐ白い泥茨墨縁ど足ぐう代小の紅光紙家
の方へとき江州ぐう算学ぐよ足ぐうぐう
ぐぐ人用米あぐく行ぐく拙語の序ぐふぐ思ひ

出くれたるこの山里方の海領分より中江藤樹とい
ひしひとあるべしとのたまふや其人を伺ふに
平松しもりもやとの海うら出しより彼人を改め
藤樹先生の門下い我父祖の来る数いくしひ
て老父我と愛をるれあ爾うまを方へ行くこまるよ
行くこ家て祝義の一献と出しくはさせぬは
平生なしハ人せ下べしとて奥より徒歩と
改め一軸と携へ出くこ体ようけ逢ふ下さりて
あせ下るあ其こる数かくたうなりまぶ我もあら



ひにてぎちぶしてやこあ分郡庚小
あくこ呈竟領地の一農夫なるとかくまで
教せ下中代貫と奏し徒とそひのふこ
るもろ意ハ又藤樹先生も真の大儒なること
もしぶ先くおりぬとやさし什二年耳う
ばりあるバ仕原ようを屋敷もきに墓も偶し溝
堂と一見せぶやしこりしく大溝の示の加茂とい
ふ所より西へ入る中八丁ばかり小川村ようを小農
夫老婆ばかりなくこと教へ逢ふるももく

て講堂の名は知らず西方とぐーあまたの長と
ある吉村周助といふ儒者の作へ書院〜講
堂成れり所に玄関へ入るに玄関へ
といふ草鞋ぬげたるを見うれそを講堂の案
内とといへど浅く見あるきのあるとおもはるまく
やむなくとばば草鞋脱ぎ解て玄関へ上る
と周助出迎ふ四十くらいの豪傑なる学問
芸術も深き人なり案内講堂へ通
ねし所生徒八周助門人へ礼拝と言て講堂

の端とくるよ持ぞまりうと通くく相接堂
幅二間ばかりに堂ハかゞやきて間数四間あり二重院
廊間〜十五畳横ぐれもう向ふ方に拝入あり
外出流溝陽と平次郎射落の名八畳ある所
拾畳目次長を所だろう正面横側のとこ藤樹出院
といふ四字の額あり分部昌人筆相手書とかつて平安
の名と朱子と白鹿洞の規則を板に書てしりけそう
さべこのあと遠乃宮風だなるに此文とりけ〜〜と孫
結ぶ宮柳入の間と深衣と者せる絵像あり新美

の時分家に厨子あり其内に神主の上総介
先生姓中江諱原字惟命号顧軒称藤樹先生
慶安元年戊子八月廿五日卒葬邑東北玉林寺の
こなた八町ばかりの所の内の神主者手法のごとく相惡くこん
綱の周助宅へ居まいらせ候ハかく仕業と思ひ
同じく父祖代門人にて候よ者ども多く清水に住
ゆうゆうく八先生より孫も多くハ頼て来るゆう
対文ゆうゆうきゆうき門人もなりもとハ毎月六度
ゆう村民と集て論語を講じ候も基と毎月六度
よ来りて勤やうなり又春秋の祭礼村中等
和るまも基成弘敬しせるゆうかく猶成も郡内居
ゆうゆう講堂の源を覆い領ゆうゆうカ源し礼領ゆう
もゆうゆう弟子あるに弘服と者ゆうゆう堂中へ入
ゆうゆう夫より先生の生ゆうゆうに先生ゆう余
ゆう伊藤の大洲侯の招ゆう為ゆうゆる先生の老母松
ゆうゆう四ゆう波ゆうゆる紀州ゆう居ゆう先生ゆう
あゆうゆうゆうゆる所やむゆうゆうゆる安藤ゆう
いゆう国を離ゆうゆる度晴ゆうゆう

既よりこの後、ひのく後部書紙出し、探索して大洲
と呼び出し、くはつ去れるの定て、近ノ日とのつ且て、市
く罪せる人うとて、亜仏州一も降伏系統江
源くかくもて、仏法あるしかえまを考えるしかる生
るの必ず後も罪しを拾り法仏はさいるも考くいる自然
なるりあるもちろん江島ノ後ノ者毎と書いをし
を後諸ふの諸後ちを招きあるしこと亜仏法人
らもを仏法ノ招ふ招きまを門人の無沢と生さしし幾後
ちくて死去あり後ノ四十ヲ九しあ仏講堂の建し

も死去二三年おのの外ノ先生の編ノ使ノ墨常省
先生と称ノ名の病ノ外ノ先生ノ使ノ墨常省
ちて喜人ノ多くして中江氏の子孫絶ノ今い
射馬の家中ノ先生あるく今ノ中江と名
ちるの嘱ノ周助ノ墨ノ其餘教
近郷ノ源く源ノ人仏小川村の百姓も年
篤き者ノ多へども無筆ノ多ノ多ノ
よも酒ノ多ノ多ノ無筆ノ多ノ
情愛ノ多ノ

いへども其土のいなかしと云ふ故に此辺の風俗温和
淳朴にして不少不盛なる様ずあり凡そなど
も其内前の尾張肥後の物語お道中のききき事とも知る
熊沢先生は其門人ともいへども功績といへども云ふべき
事もなくたゞのつ故さ見せざる其人も今の時は功名し
と称する此人藤樹先生なる従はりまして初めを得る
頃長浜加賀の飛脚金子百両を預り捧げ
京へ登るに江州河原市より栗尾の馬を雇ひ
榎木の宿に泊るとて馬より河原市へ帰り馬の亭主を

呼んで襟を解して緋のたいそう紙布一つ出ふり取
あげ又馬は今当直で各あるまく大に驚きをのの
御の為に足も一たるらぬとせしと思へば能く侍榎本の宿に
て取さ金勝の泊まる宿にて主の前面し委細
尋問するにと然るは其金銭を主し尋ねしけるに尤
脚は今しき者の此みえざる紛然して暁びけり
女の孫なる所在金子の拾る由と主し馬子
あるのし此金百両なくば我一命終ふのこなりけ
親兄弟までも罪科にあるべき所ば此志の高恩

中くらゐの山ちゝんでてきよあるゝ仏ども五百羅の羅
漢ふたりたちまちに海と成て水より馬乃大ゝ鯨ゝ紅
ゝ緋色ふくゝゆらゆらの人金とうあくよう五綱のふくたの
仏ゝ山ゝあるべきゝとよびぶたりたるくよこ
ゝ人ゝともさらに文ずしてゆんとする所のむこ
ゝとんど指あしゝ角ゝみあゝふゝ五百ゝ
指ゝ角ゝしてはりふゝ今武吉とたゝせめて
五百ゝ我仏の指びゝ文のふゝへしたゝく
一ゝ家ゝ所今言もい称ゝゝと

和とゝゝ一向成ゝしゝふまぎ仏ゝ更ゝ仏ゝ
ハ五百ゝゝ当ゝゝかくゝゝゝゝゝ御
ゝゝ御仏ゝゝ我仏ゝあゝさらゝ餘仏
ふくのゝゝ人ゝゝゝゝ見武百又とゝゝ
後中ゝむゝゝ五百武ゝ近ゝゝ見ハ今
見ハ我ゝゝゝゝゝゝ見ゝゝ
ゝ酒成ゝ甚家乃人ゝゝゝ我ゝ弁仏の
ゝゝんゝ成御ゝ感ゝ塩ゝゝゝゝ
ハいゝゝゝ人ゝゝ仏ゝ名ゝゝ者ゝ

ば又伯一つ知る者にあらざるべし只我在所の名所の
小川村と云所に行く什村よりあるよりあるつとらふ人たり
て夜ごとに僧人といふ人あり某も知らずしく
少行らしく釈ふも学なとはくまくしく人さ大切
よするものの人のあるえあるものくを相通ハ沙
ふべうくずるくつふ事学法ようたらの
金ゑも我物よあらぬ所にて程をと知し
近のこころうとひまくく帰りあ郷ハ
京へのぼりいつの宿ふるあ程拙も世食い事程事

いくのびて名方おも舞面もとること有し
法事とくりく伝るに初よし甚家社妻ゑ越沢
法帝八四去ちのぼり若く学文修行最中のうな
ばゝ山ゑ語然ゆてもくくこを孫の儒とらふのく
こて年五日ちぐに江州よりあり小川村と島て随従
ゑ新くとくに人ゑ数しづき後の学徒ふしこそ
よ随従ゑ学ゑ修ゑ越沢ゑくもくに新しく
二日ゑ間茨樹の門よちぐみて茨樹の老
如ゑ我ゑ記毒ぐりくゑ老問へ尋ゑとあり

故いかゝくて因へ介はひに所生の奇物とせゝ
ゝ
ゝ甚だ奇特と称ゝ招きまひしを
多くて為分なりと雖ゝ辞し門人無沢らふも
の有り市役も立へき者なりとゝ無沢を生さと
ゝらいづまゝ格ゝの半ども出あ語ちれど義
樹先生の事伝ゝくゝくゝ人もゝ生てゝ
人生ゝ五ゝ戒ゝ多ゝ
見るべきなり
阿吉屋松

実方中将の墓所ひりるとゝふ所に屋の松ハ月
ハ奥州と雖しかるに今ハ第一の内よ屬して山形の城
下ゝゝ神の方ともいへども二里ばかりと隔てゝ
雲龍寺玉山と云寺ハ松尾芭蕉翁の墓所ゝ
の陰茶ゝ蔵りく侍ふ因幡堂あるゝ場
面ゝ打びしゝハ月日あやゝの帝白かりしゝ辺よ
り山形あゝらの婦女ゝ布あゝらはりふよ布て
はゝ蓋ゝゝゝゝゝゝ必人ゝふゝ
拾ゝ帰ゝく人ゝ小間ふ不社人ゝて肖き



ゝとゝふゝて住果しゝるゝいうの仏ゝゝ亜乃
風ゝゝゝゝ牛ゝゝ芭ハゝ者ゝ
ふゝぶきゝゝゝ下女ゝゝゝゝゝゝ
自分ゝ今もゝゝ持ゝゝ只家者ゝ者
のゝ持しゝゝ実も首絡の老ゝ女ゝ作ゝ
るゝゝ市女笠きゝ単のゝきゝゝゝ
去年ゝゝゝゝゝ公今ゝゝゝゝ
すゝく奥州筋ゝゝハ者ゝゝゝワラしゝゝふゝ
人のゝ女ゝゝ加者ゝゝふゝ古代の初ゝゝ

東遊記卷之四終